☆ 例題23　次の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

「こんにちは」とその初老の男が声をかけた。

猫は少しだけ顔をあげ、低い声でいかにも大儀(たいぎ)そうに(注1)挨拶(あいさつ)をかえした。年老いた大きな黒い雄猫だった。

「なかなか良いお天気でありますね」

「ああ」と猫は言った。

「雲ひとつありません」

「……今のところはね」

「お天気は続きませんか？」

「夕方あたりからくずれそうだ。そういう気配がするな」と黒猫はもぞもぞと片足をのばしながら言った。それから目を細め、あらためて男の顔を眺めた。

男はにこにこと微笑(ほほえ)みながら猫を見ていた。

猫はどうしたものかと少しのあいだ迷っていた。それからあきらめたように言った、「ふん、①あんたは……しゃべれるんだ」

「はい」と老人は恥ずかしそうに言った。そして敬意を示すように、よれよれになった綿の登山帽を頭からとった。「いつでも、どのような猫さんとでもしゃべれるというのではありませんが、いろんなことがうまくいけば、なんとかこのようにお話をすることができます」

「ふん」と猫は簡潔に感想を述べた。

「あの、ここにちょっと腰をおろしてかまいませんか？　ナカタはいささか歩き疲れましたので」

黒猫はゆっくり身体を起こし、長い髭(ひげ)を何度かぴくぴくと動かし、顎(あご)がはずれてしまいそうなくらい大きなあくびをした。「かまわないよ。というか、かまうもかまわないも、好きなところに好きなだけ座ればいい。それについちゃ誰も文句はいわないよ」

「ありがとうございます」と言って男は猫の隣に腰を下ろした。「いやいや、朝の6時過ぎからずっと歩いておりました」

「えーと、それで、あんたは……②ナカタさんっていうんだね」

「そうです。ナカタと申します。猫さん、あなたは？」

「名前は忘れた」と黒猫は言った。「まったくなかったわけじゃないんだが、途中からそんなもの必要もなくなってしまったもんだから、忘れた」

「はい。必要のないものはすぐ忘れるものであります。それはナカタも同じであります」と男は頭をかきながら言った。「といいますと、③猫さんはどこかのお宅で飼われているんじゃないんですね」

「昔はたしかに飼われていたこともあった。でも今は違う。近所のいくつかの家でときたまご飯はもらっているけど……、飼われちゃいない」

ナカタさんはうなずいて、しばらく黙っていた。それから言った、「それでは猫さんのことを、オオツカさんと呼んでよろしいでしょうか？」

「オオツカ？」と猫はちょっとびっくりして相手の顔を見つめた。「なんだい、それは？　どうしてオレが……オオツカなんだい？」

「いいえ、たいした意味はありません。ナカタが今ふと思いついただけであります。名前がないと覚えるのに困りますので、適当な名前をつけただけであります。名前があるとなにかと便利なのであります。そうすればたとえば、何月何日の午後に＊＊２丁目の空き地で黒猫のオオツカさんに出会って話をしたという具合に、ナカタのような頭の悪い人間にも、ものごとをわかりやすく整理することができます。そうすれば覚えやすくなります」

「ふん」と黒猫は言った。　　（村上春樹『海辺のカフカ（上）』新潮社）

（注１）大儀そうに：疲れていてめんどうくさいような様子で

問１ ①あんたは……しゃべれるんだとあるが、どういう意味か。

1　あなたは猫と話せるんですね。
2　あなたは日本語が話せるんですね。
3　あなたは声が出せるんですね。
4　あなたは猫の気持ちがわかるんですね。

問２ ②ナカタさんっていうんだねとあるが、猫が男の名前を知っているのはなぜか。

1　以前会ったことがあるから。
2　人の名前がわかる能力を持っているから。
3　初老の男が自分で名前を言ったから。
4　人から聞いて知っていたから。

問３ 男が③猫さんはどこかのお宅で飼われているんじゃないんですねと言ったのはなぜか。

1　こんなところでのんびり寝ているなら、きっと飼い猫ではないだろうと思ったから。
2　こんなところでのんびり寝ているなら、きっと飼い猫だろうと思ったから。
3　今、名前を覚えていないなら、きっと飼い猫ではないだろうと思ったから。
4　今、名前を覚えていないなら、きっと飼い猫だろうと思ったから。

問４ 男は、名前というものをどう考えているか。

1　名前は人間や猫にとって不可欠で、その人自身を表すものであるから、つけるときには、その人らしいものを考える必要がある。
2　名前は、特別な意味を持たず、その名前である必然性もないが、ものごとを整理し、記憶するのに便利である。
3　名前というのは、実用的というより、その人（猫）の人生に影響を与える不思議な力を持つものであるから、本人が自分でつけたほうがいい。
4　名前は、猫の世界では必要ないのだが、人間との関わりの中では便利なものであり、自分とつきあう以上は、猫がものごとを整理して記憶できるようにつけておいたほうがいい。

キーワード：初老の男、猫、ナカタ、オオツカ
（初老の男＝男＝老人＝ナカタ）
（猫＝年老いた大きな黒い雄猫＝黒猫＝オオツカ）
「　　」：初老の男と猫の会話　→　小説の一部分？

問１ に答える

「下線部」の意味を問う問題。猫の質問の意味を読み取る。

猫：　「あんたは…しゃべれるんだ」
‖
男：「はい…いつでも、どのような猫さんとでもしゃべれるというのではありませんが…なんとかこのようにお話をすることができます」

猫に対する男の返事から、「あんた（＝男）は猫と話せるんだね」という意味だとわかる。

1：正解
2：男と猫の話す言葉が日本語だとは書かれていない。
3：猫の言う「しゃべれる」とは、単に声が出せるという意味ではない。
4：猫の気持ちがわかるのではなく、猫と話せると言っている。

問2 に答える

理由を問う問題。

> 男：「ここにちょっと腰をおろしてかまいませんか？
>
> ナカタはいささか歩き疲れましたので」
>
> ……男は猫の隣に腰を下ろした。
>
> 猫：「…それで、あんたは……ナカタさんっていうんだね」

「歩き疲れたので、腰をおろしたい」のは男である。つまり、男は自分自身を「ナカタ」と呼んでいることがわかる。これを聞いて、猫は男の名前が「ナカタ」だとわかったのである。

1：この後「ナカタと申します」と自己紹介をしているので、初対面である。

2：男が自分を「ナカタ」と呼ぶのを聞いたからで、猫に特別な能力があるわけではない。

3：正解

4：男自身が名前を言っている。ほかの人から聞いたのではない。

問3 に答える

理由を問う問題。接続表現に注目する。

> 猫：「名前は忘れた。…まったくなかったわけじゃないんだが、途中からそんなもの必要もなくなってしまったもんだから、忘れた」
>
> 男：「といいますと、猫さんはどこかのお宅で飼われているんじゃないんですね」
>
> ‖　　‖
>
> ということは、つまり　　飼われていないということですね

「といいますと」は、相手の発言を根拠にして何かを推測し、「ということは、つまり…ですか」と確認するための表現である。男は、直前の猫の発言（＝名前は必要なくなったので忘れた）を根拠にして、「今は飼い猫ではない」と推測している。

1：猫の言ったことから推測したので、寝ている様子を見たからではない。

2：飼い猫とは思っていない。

3：正解

4：飼い猫とは思っていない。

問4 に答える

登場人物の考えを問う問題。名前について男が話している部分を探す。

> 「たいした意味はありません。…今ふと思いついただけ…。適当な名前をつけただけ…。名前があるとなにかと便利…。ものごとをわかりやすく整理することができます。そうすれば覚えやすくなります。」（いちばん最後の「男」の発言）

男は名前に特別な意味はなく、その名前である必然性もないが、名前があれば、ものごとを整理しやすく、覚えやすくなるので便利だと考えている。

1：名前が不可欠であるとも、その人自身を表すものであるとも、言っていない。

2：正解

3：名前は不思議な力を持つとも、自分でつけたほうがいいとも、言っていない。

4：名前をつけるのは、猫ではなく、男がものごとを覚えやすくするためである。

・小説では、登場人物はだれか、「　　」はだれの発言なのかに気をつけて読もう。

練習56　次の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

人は、自分が育つなかで身につけた言葉を「ふつうの言葉」と思い込む傾向があります。いわば「刷り込み」です。それが基準になり、聞き慣れない言葉や表現を耳にすると「気になる」とか「①おかしい」と感じたりするんです。

「奇妙だ」「乱れている」と指摘される言葉も、いつしか、社会的に「当然」と広く受け入れられるようになるケースは珍しくありません。その過程は、誤用→揺れ→慣用→正用という流れで整理できます。時計でたとえるなら、午前0時から3時ごろまでが誤用、6時ごろになると揺れの段階に達し、9時ごろは慣用、そして正午へと近づいていくイメージです。

例えば「②耳ざわり」。本来は「耳障り」で、「目障り」などと同じく、否定語でした。それが「耳触り」として「耳触りがいい」といった表現が使われ出した。

「手触り」や「舌触り」があるので、勘違いしたのが始まりかと思われますが、いまや誤用の域を超えて、揺れ段階にまで広がっているのではないでしょうか。いずれ慣用となり、正用へと向かうかもしれません。

年配層には「気になる」「不快だ」と受け止められがちな言い方に、若い人たちがよく使うようになった「私って、○○じゃないですか」があります。通常は、相手もすでに知っていることを確認してから話を続ける話法です。

ところが「私って、4月生まれじゃないですか」とか「遠距離恋愛じゃないですか」などと言われると、状況によっては、③そんなこと知るか、押しつけがましいぞ、といった抵抗感が生じます。

でも見方を変えると、これは話者が相手に親密さを表現する話法と言えそうです。詰問調を避け、婉曲(えんきょく)に「知ってますよね、知らなくても理解できますよね」という気持ちが込められていて、うちとけた感じが出せる。若者たちの感性に合うのでしょう。

旧世代にはこれと対置できる話法があります。「釈迦(しゃか)に説法(せっぽう)(注1)ですが」「すでにご承知のように」などと前置きしてから展開する話法です。ところが、こちらには「どうだ、知らないだろう」と、慇懃(いんぎん)に(注2)相手を突き放すような感覚が隠されていたりするんです。

世代間で相手との距離の取り方などにズレがあり、それが自分の許容範囲を超えたと感じるときに「奇妙だ」「乱れている」となるんです。

（井上史雄　朝日新聞2005年4月29日）

（注1）釈迦(しゃか)に説法(せっぽう)：すでに深い知識を持っている人に向かって解説する、愚かな行為

（注2）慇懃(いんぎん)に：礼儀正しく

問1　①おかしいと感じるのはどんなときか。

1　幼いころから自分が聞いてきたものとずれているとき
2　社会的に当然と思われるものと違っているとき
3　子どもっぽさが残っているとき
4　いわゆる「刷り込み」表現と似た言葉を聞いたとき

問2　②耳ざわりという言葉の使い方の変化を、正しく説明しているものはどれか。

1　舌触りのように「耳触り」もあると勘違いし、「耳ざわり」は否定的な意味で使われるようになった。
2　目障りのように「耳障り」もあると勘違いし、「耳ざわり」は肯定的な意味で使われるようになった。
3　本来「耳ざわり」は肯定的な意味だったが、勘違いから、否定的な意味の「耳障り」も使うようになった。
4　本来「耳ざわり」は否定的な意味だったが、勘違いから、肯定的な意味の「耳触り」も使うようになった。

問3　③そんなこと知るか、押しつけがましいぞとあるが、そう感じるのはどんな状況の場合か。

1　相手が家族、友人なので、「そんなこと」を知っているのが当たり前の状況
2　相手とそれほど親しくないので、「そんなこと」を知らないのが当たり前の状況
3　「そんなこと」を知っていると恥ずかしいと感じられる状況
4　「そんなこと」をさっき話したばかりという状況

問4　「乱れている」と感じられる言葉について、筆者はどう言っているか。

1　「乱れている」と感じるかどうかは世代間で異なることを、若者は知るべきだ。
2　「乱れている」と感じたなら、自分の感覚を信じて表現の誤りを指摘したほうがいい。
3　「乱れている」と感じる言葉の変化は、不快に思う人が多いため、正用になりにくい。
4　「乱れている」と感じられる言葉も、時代とともに正用と認められていく場合がある。